

平松廃寺—地下に眠る幻の古代寺院—

奈良市平松五丁目

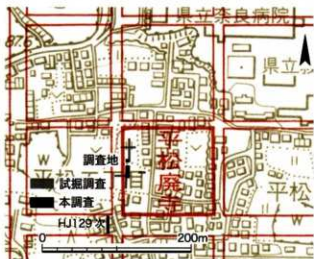
平城京の西端に近い右京四条四坊十二坪には平松廃寺という今は失われた寺院が存在したと想定されてきました。

昭和10年、この地を訪れた立正大学考古学研究室の数名が軒瓦を採集しました。この地ではそれ以前にも瓦が採集されており、地名をとって平松廃寺とよばれています。以前には基壇の高まりも残っていたようですが、近年の宅地開発により、その頃の様子は失われています。

平成28年、この右京四条四坊十二坪で宅地開発が行われることとなり、事前に調査を行いました。場所が平城京西端の丘陵地でもあることから、まず遺構の有無や残存状況を確認するための試掘調査を行いました。その結果、土地が既に削られて大きく改変され、遺構が失われていた場所が多かったのですが、奈良時代の瓦を含む溝が見つかり、その場所を中心に発掘調査を実施しました。発掘区の位置は坪の西端中央部にあたります。

調査では幅1.3～1.5m、深さ0.8～0.9m、長さ20m以上の「」形に西に曲がる南北方向の溝を検出しました。溝は規模も大きく、人為的に掘られたことは間違いないものですが、寺院の建物の雨落溝にしては大きすぎるように思われますし、道路側溝と考えると位置が合致しません。この溝がどのような性格であったのか、また平松廃寺に係るかについては調査できた範囲が狭いこともあり、残念ながらよくわかりません。しかし、この溝からは遺物整理箱で90箱以上の瓦が出土しており、出土した瓦の内容や量からみて、付近に寺院があったことは間違いないと思われます。瓦とともに出土した土器から溝は10世紀前半に埋まったことがわかります。おそらく寺院の廃絶時、溝を埋める際にこれらの瓦が廃棄されたのでしょう。

平松廃寺で使われたとみられる瓦は右京四条四坊十一坪や十三坪でも出土・採集されていて、平松周辺に広く分布しています。位置が平城京西端の丘陵地でもあり、寺城が条坊区画に則っていた



調査位置図 (1/5,000)

かという点も検討する必要があるかもしれませんが、周辺に複数の寺院があった可能性を考えなければならぬのかもしれない。

いずれにせよ、これから出土した瓦の調査を進め、今後も周辺の発掘調査を積み重ねていくことにより、平松廃寺の実態が解明されていくものと思われます。



発掘区と検出した南北溝 (南から)

出土した瓦について

今回の調査で出土した瓦には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦があります。平成29年1月現在、すべての瓦の整理作業が終了しておりませんが、平松麿寺の瓦類は大きくA・B2つのグループに分けられることがわかってきました。

Aグループ 粘土紐桶巻き作りで、表面は黒く、内部は淡褐色で、軟質に焼き上がる瓦で、出土瓦類の大半を占めます。(写真1)。また、最も多く出土した軒瓦の一组、複弁8弁蓮華紋軒丸瓦(6345A)と6回反転偏行唐草紋軒平瓦(6642D)はこのグループに属します。軒丸瓦6345Aは外縁に唐草紋を巡らす珍しい紋様配置です。軒平瓦6642Dは今回の出土品で紋様構成の全貌が判明しました。頸部を削り出した後、段部に沿って強めの指ナデを施す点が技術的な特徴です。6345A-6642Dは出土量からみて、奈良時代初めの主要な組み合わせとみられます。6345Aは唐招提寺・田中麿寺(橿原市)に、6642Dは山田寺・田中麿寺で同范品がみついています。他に軒瓦として、1点しか出土していませんが、薬師寺所用軒丸瓦(6276E)もAグループと考えられます。平松麿寺出土6276Eは薬師寺所用6276Eより范型が使い込まれ、かなり傷んだ段階の資料で、製作も薬師寺出土品と異なります。薬師寺の造瓦所で一定量の製作の後、平松麿寺の造瓦所に范型が移動した可能性が考えられます。

Bグループ 粘土紐桶巻き作りで、表面が青灰色、胎土中に白色の砂粒を多く含んだ硬質の瓦です(写真2)。Bグループの軒瓦には重弧紋軒平瓦があります。瓦当面だけでなく、頸部にも施紋している点が特徴的で、7世紀後半の瓦です。

他にも少数ですが、粘土板桶巻き作りで胎土はやや粗く、硬質に焼きあがり、同心円の当て具痕跡のある平瓦(写真3)も出土しています。同心円の当て具痕跡は須恵器によくみられるものですが、瓦には珍しいものです。明日香村に所在する飛鳥寺や飛鳥池遺跡からも同心円当て具痕跡のある瓦が出土しています。

Aグループの出土量と軒瓦の年代観から、平松麿寺では平城遷都後、間もなく造営工事があった

とみてよいと考えますが、これに次ぐ量の7世紀後半のBグループの瓦の存在から、この造営が従来この地にあった寺を改築したものか、飛鳥等から移建されたものかは不明です。

今後さらに、製作技法や同范関係の調査を進めていくことにより、生産地や、他の遺跡との関係性を明らかにしていければ、寺名すら伝わらない平松麿寺の性格にも迫ることができると考えます。



写真1 Aグループの瓦



写真2 Bグループの瓦



写真3 同心円の当て具痕跡のある平瓦